

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652017

研究課題名(和文) 近世初期障屏画における金の使用と宗教思想に関する調査研究

研究課題名(英文) Research on the relationship of religious thought and the use of gold in paintings of early modern times

研究代表者

畠山 浩一 (HATAKEYAMA, Kouichi)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：90344639

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまでその世俗性や装飾性が強調されてきた近世初期の障屏画において、新たに仏教を中心とした宗教思想の表出を画面上に認めようとするものである。特に背景表現における金の使用法に注目し、様式的な問題にとどまらない、主題上に果たすその役割について考察を進めた。同時期には背景をすべて金とした総金地形式が流行するが、これは画面を装飾する効果を持つと同時に、画面内空間を理想的空間として規定していると思われる。それはまた、宗教思想によって長い時間をかけて育まれた、人々の感覚的規範を反映したものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In the paintings of early modern times that the decorative and secularity has been emphasized so far, this study is intended to admit the screen on the expression of religious thought, including Buddhism. I focused on the use of gold in the background in particular, and considered the role which it plays on the theme. Around this time, the form that all the gold background is epidemic, which has the effect of decorating the screen. At the same time, it is considered as being defined as an ideal space to screen space. About this, I think that it is a reflection of the sense norms of people brought up over a long time by religious thought.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史 宗教史 思想史

1. 研究開始当初の背景

(1)文化史で言うところの桃山時代の絵画、とりわけ障壁画や屏風絵などのいわゆる障屏画については、華麗な色彩や大画面を意識した機知的構図といった様式的特徴のほか、近世的自我の芽生えに伴う人間への関心、風俗描写の流行といった主題的特徴などに、研究の主たる関心が向けられてきた。特に様式的特徴においては金銀をふんだんに用いた装飾性が、主題的特徴については人事風俗への関心の高さに基づく世俗性が、それぞれに核をなす要素と考えられてきた。

(2)これに対して、申請者は研究開始直前の論文で、風俗画において背景を総金地化することの意義について、宗教的感覚の表出という、これまで注目されることのなかった一面について考察した(「金色の世界 遊楽人物図における総金地表現について」ふくやま美術館『黄金美術』展図録、2010)。これは、世俗画における装飾的特徴と見られてきた表現=総金地に、宗教的感覚を反映した主題上の意義を見出そうとしたものであり、ともすれば二律背反的に捉えられがちな世俗性と宗教性について、その共存を積極的に認めようとした試みであった。

(3)本研究は、(1)のような研究状況において、特に金銀の使用目的を装飾性にのみ求ようとする傾向に疑問を覚えたことが出発点となった。一方、同時代の特徴として語られる世俗性の高さについては、ある程度それを認めつつも、その背後には宗教思想に基づく思考原理が存在し、絵画表現に影響を与えたのではないかと考えるようになっていた。本研究はこれらの疑問を総合的に考察することの重要性を痛感し、着手しようとしたものである。

2. 研究の目的

(1)本研究は、これまで装飾性や世俗表現が強調されてきた近世初期の絵画、とりわけ障屏画において、新たに宗教的価値観の表出を画面に見出そうと試みるものである。

特にその装飾的表現の根幹をなす金の使用に着目し、風俗画をはじめとする世俗性の強い絵画で、それがどう用いられているかを検証することで、技法的、様式的な問題にとどまらない、主題上に果たす金の機能について考察を深めることとした。金の使用形態に見られる様々なバリエーションは、同時代の人々が意識的、あるいは無意識的に保持していた宗教的世界観と密接に関係していることが予想され、その検証は絵画研究史に新たな問題意識を生むと思われる。

(2)本研究では、こうした関心に基づきながら、特に金の使用に対する画家と鑑賞者の意識について注目し、金雲や金地の機能、宗

教的表象としての意義について検討する。その際、以下の点に留意して研究を進めることとした。

金雲並びに金地の発生期を可能な限り絞り込み、発生初期において期待された効果、機能について考察する。同時に光輝表現に関する歴史的意識を探っていく。

金雲、金地といった部分的な金の使用を経て、背景をすべて金で埋める総金地表現が生まれた経緯を探り、発生期をある程度特定したうえで、その発生理由と効果、機能を考察する。

文献史料等から、同時代における宗教的感覚について、特に聖なる世界や存在をどのように認識していたか、それらと現実世界がどう関わり、自分達現実の人間がどう向きあうべきと考えていたか、検証する。

近世人の思考原理が形作られていく過程で、宗教的価値観が果たした役割について、特に世界認識のパラダイム形成に宗教思想がいかなる影響を与えたのか、検討する。

(3)以上の成果をまとめ、最終的に近世初期障屏画に、同時代の宗教的価値観、宗教に基づく思考原理がどのように反映されているのかについて明らかにしていきたいと考える。

本研究により、宗教を主題としない絵画に内包される宗教性の実態を探り、金碧障壁画の装飾性や風俗画の世俗性が強調されてきた研究史の見直しを計っていきたい。それにより、近世初期絵画の特徴を過不足なく明らかにすることができると思う。とりわけ、金地表現の意味と機能を、宗教的価値観の表出という側面から検証することの意義は大きいと思われる。その検証が、絵画をはじめとする芸術分野のみならず、当時の人々の意識、感覚や思考原理、価値観などを、総体的にとらえ直すきっかけになるよう、研究を進めていくこととする。

3. 研究の方法

(1)絵画作品を対象とする性質上、本研究では何よりもまず作品の実見調査が重要となった。とりわけ今回は、同時代の作品を通観して、時代傾向を探ることが目的であり、国内外を問わず、数多くの作品実査が研究の鍵を握ることとなった。その際、特に以下の点に留意して調査を行った。

金地金雲、総金地、それぞれの形式をとる作品の中でも、初発性の高いものをまずは重点的に調べ上げ、調査する。

金地金雲形式、総金地形式を採用する作品群を総体的に調査していくことを主眼とするが、他方、同じような主題を扱いながら、金の使用頻度が低い、あるいは全く使用しない作品群についても、考察対象として取り上げることとする。それらの作品の特徴を明確化し、金地採用作品との違いについて比較検討

討することで、翻って金地採用作品の特質を明らかにするためである。

特に風俗画の分野において、総金地形式をとるものと金を使用しない素地形式となるものを比較し、差違の理由を考察する。申請者のこれまでの研究から、両者の差異には異世界に対する認識や空間に対する感覚的規範が影響していることが予想されるため、その是非を確かめることに留意して、考察を進める。

西洋の宗教絵画、特に聖人の肖像を描いたイコンについて検討する。イコンについては背景を金で塗り込める手法が特徴的で、聖なる存在を表すための表象として金が用いられていることが確認されている。こうした西洋絵画との比較を通して、日本の作例についての理解を深めることとする。

近世初期はキリスト教の流入に伴い、上記作品の類品が実際に日本に輸入、あるいは日本で制作されており、それら洋風宗教画が日本の絵画作品に影響を与えたのか否か、与えたとすればどのようなものか、考察する。

また、参考例として、南蛮屏風など、西洋世界や西洋人を主題とした日本絵画の検討を行う。とりわけ「泰西王侯騎馬図」(サントリー美術館、神戸市博物館分蔵)をはじめとする西洋人を主題とした絵画は、ヨーロッパから来た宣教師の指導下で作成された可能性が指摘されており、西洋画との主題的、技法的関連を探る上で格好の材料であると云える。

(2) 一方で、日記や説話等の文字史料、文学作品を広く検証し、同時代の世界観や思考原理を明確化した。特に仏教をはじめとする宗教的思想が、人々の行動、思考をどのように左右したかについて注目し、思考原理のパラダイムを可能な限り明らかにしていくことに努めた。その際、特に以下の点に留意して検証を進めた。

まず、日記等の同時代一次史料を中心に史料の解析を行い、人々の思想、思考原理について探る。特に浄土などの理想世界に関する認識、自分達が生きる現実世界に対する認識、両者の差違などについて注目しながら、近世初期の世界観、さらには思考原理を特徴付ける思想的バックボーンについて、考察を進める。

行動および思考原理のパラダイムに、仏教をはじめとする宗教的思想が、どのような影響を与えていたのか考察する。そうしたパラダイムについては、多くが長い時間をかけて無意識下で形成されていったことが予想されるため、言語史料において宗教思想との直接的な関係性が明示されることはほとんどないと思われる。その点に注意した上で、パラダイムを特徴付ける要因について、注意深く探っていくこととする。

(3) 上記ふたつの研究を並行的に進めなが

ら、最終的に、絵画作品に表された形式的、主題的特徴と、思想研究から導き出された思考原理のパラダイムを照らし合わせ、芸術作品を通して見だし得る時代思潮について、検証作業を行った。その際、特に留意した点は以下の通りである。

障屏画における金地の採用については、異世界に対する価値規範が反映されていることが、これまでの申請者の研究から予想されるので、その妥当性を検証する。

上記の如き価値規範の反映が、どこまで意識的に、あるいは自覚されて行われたのかについて検証する。思考原理のパラダイム同様、半ば無意識的に表現へと結びついた可能性も予想されるため、できるだけ具体的にデータを挙げて検討することに努める。

文学や演劇等、ほかの芸術形態における状況についてもできる限り参照し、影響関係の明確化に努める。また、絵画作品特有の表現、他とは異なる傾向を見せる特徴があるのかどうか、注意しつつ比較検討を行う。

4. 研究成果

(1) 本研究は、これまで装飾性や世俗表現が強調されてきた近世初期の絵画、とりわけ障屏画において、新たに宗教的価値観の表出を画面上に見出そうと試みたものである。特に、背景表現における金の使用法に注目し、様式的な問題にとどまらない、主題上に果たすその役割について研究考察を進めた。

(2) 三年間にわたる研究において、のべ二百点程の作品について実見調査を行うことができた。それらの作品については画題、表現手法など、項目ごとに分類し、基礎的なデータを蓄積してきたが、最終年度において、項目を整理した上で作品を取捨選択し、総合的なデータベース化をはかった。特に注意すべき項目として、金の使用の有無、その形態(金雲、金地、それらの複合等)、野外や室内といった空間設定、人物や鳥獣の有無などを設定した。

(3) それらのデータを分析した結果、まず注目すべき傾向としてあげられるのが、風俗画における総金地形式の採用である。十七世紀に入ると、景物描写を減らしたうえで人物を大きく描く遊楽人物図が流行するが、それらのなかでも、背景を総金地とする作品のほとんどにおいて、登場人物が履物を履かないという特徴が認められる。一方で、履物を履く作品には、金地形式を採用するのがほぼみられない。

これは第一義的には、室内/野外の別が総金地形式の採用/非採用に結びついたと考えられるが、中には室内と野外が混在しているかのような作品も認められ、必ずしも両者を区別すべく採用された形式とは思えない。そもそも、なぜ野外景では総金地が採用され

ないのかという疑問が生じる。

こうした作品群の主題、表現内容を比較検討した結果、総金地という特殊な背景表現は意図的に採用され、画面内空間を一種の聖性を帯びた、非日常的な想像上の理想空間として表現しようとしたものと考えに至った。総金地作品において履物が表されない点については、そこが聖性を帯びた空間ゆえに忌避されたもので、必ずしもその有無が野外と室内の別を示さないと判断した。逆に言えば、履物を履いた人物が描かれるということは、その画面空間が理想化されたものではないことを示しているといえる。

(4) このように、一見装飾性を高めるべく採用されたかに見える金地が、画面内空間の性格を規定するという、主題に大きく関わる機能を担っていることは注目に値する。風俗画以外分野でも、例えば花鳥画などでは、四季を同一画面に混在させる点などが、一種の理想郷的表現であるとこれまでも指摘されてきたが、その画面が金地金雲で埋めつくされている場合、上記風俗画のそれと共通する意味を内包すると言えよう。

また、この時代の花鳥画は、狩野永徳や長谷川等伯に代表されるように、巨木を中心とした中近景描写が中心で、遠景描写が次第に影を薄めていくことが、ひとつの特徴である。モチーフの背後には遠山ではなく、金地金雲が置かれることになるわけだが、これもまた、画面内空間を現実のものとは異なる、一種の異世界性を帯びた空間として表象したものと考えられる。

こうした特徴はまた、画面を「装飾する」ことの根源的な意味について、あらためて考えさせることにもなる。飾るということは「荘厳する」ことでもあり、飾られたものの存在を強調し、その価値を引き上げる、あるいは聖化するという作用を内包する。視覚的効果ばかりを狙ったわけではない、近世絵画における装飾の目的がそこに見出せるのである。

(5) これらの作品に見られる空間表現には、同時代の人々が保持していた宗教的価値観の半ば無意識的な表出が認められると言えよう。風俗画や花鳥画は、それ自体が宗教的テーマを表そうとしたものではないが、上記のような表現上の特徴を考えれば、画面の至る所に、同時代の人々が感覚的に保持していた世界観や価値観が反映されていると見なされる。そして、それらの多くは、仏教を中心とした宗教思想によって育まれたものであったと考えられる。

例えば、金雲がたなびき、四季が混在し、様々な花が咲き、鳥が舞う世界を形作るパラダイムは、極楽浄土世界を表現するそれと明らかに通じている。一方、金で埋めつくされた空間に遊ぶ人々の描写は、弥勒の世と喩えられた当時の時代認識を反映したものと見

なされる。いずれも、理想的世界の描出に際し、仏教をはじめとする宗教思想の思考原理や思考言語を下敷きに生み出された表現であると言えよう。

以上のように、近世絵画が金を多用するようになった背後には、人々の思考や行動を根源的なレベルから規定し、その感覚的規範を特徴付けた宗教思想の存在があったと考えられる。そして、金地金雲、さらには総金地表現が流行した背景には、装飾性の志向にとどまらない、理想的世界の再構築といった側面が強く認められることが、本研究によって明らかになったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畠山 浩一 (HATAKEYAMA, Kouichi)
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：90344639